

## 包 括 的 公 表

2021年1月～3月に報告された医療事故のうち、包括的公表となる事例は下記のとおりです。

| No. | 発生場所 | 概 略  | 再発防止策  |
|-----|------|--|--|
| 1   | 病棟   | 20 cm H <sub>2</sub> O で脳室ドレナージをする指示であったが、途中から 10 cm H <sub>2</sub> O 圧になっていたことを発見する。圧測定用の板にはゼロ点の異なる 2 本の目盛りが記されており、途中で使用していない目盛りにゼロ点を合わせたことが原因。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目盛りが一本化された測定板に切り替える。</li> <li>・ 勤務開始時、体位変換毎にドレナージの圧を確認する。</li> </ul>  |
| 2   | 病棟   | 転倒し、左下肢の骨折手術目的で紹介入院した患者が、入院期間中、何度も左腕が痛いと訴えていた。リハビリ病院への転院日に上腕骨の骨折が判明、骨折への対応が遅延した。   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 症状が継続する場合は、入院時持参の資料を過信せず、不顕性骨折の可能性を念頭に、原因を確認する。</li> <li>・ 特に転倒を契機に入院した場合、入院主目的以外にも負傷部分がある可能性を考える。</li> </ul>   |
| 3   | 病棟   | 薬剤性肝障害の診断目的で、DLST 検査（薬剤によるリンパ球刺激試験）として、血液検体と一緒に提出するために処方された薬剤を誤って内服させた。内服後に肝機能異常、アレルギー症状はなかった。   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 用法マスタ（頓用）に「DLST 検査用【内服禁止（検体とともに提出）】」を新設した。</li> <li>・ DLST 検査オーダー時、注意事項として、「DLST 用の薬剤処方時の用法は頓用の『DLST 検査用：内服禁止（検体とともに提出）』を選択するように」と表示が出るように改善した。</li> <li>・ 処方時、上記用法を選択することで、薬袋へは用法マスタどおりの内容が印刷され、処方カレンダー上は、定時内服薬ではなく、頓用薬の欄に表示されるように改善した。</li> </ul> |

| No. | 発生場所 | 概 略   | 再発防止策  |
|-----|------|---|--|
| 4   | 手術室  | <p>術後の疼痛コントロールのため、胸椎の高さから硬膜外チューブを挿入。</p> <p>挿入途中で、患者が背部痛を訴えたため、硬膜外麻酔針（外筒）を残してカテーテルを抜いた時にカテーテルが切断され、体内に遺残した。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・マニュアルの以下 2 点を診療科内で再周知し、新規職員へも必ず説明することとした。</li> <li>①穿刺中に硬膜外カテーテルを抜くときは硬膜外麻酔針（外筒）ごと抜去する。</li> <li>②カテーテル挿入の長さは 3～5 cm とする。</li> <li>・手技の修得では、シミュレーション教育だけでなく、経時的に知識、手技を上級者が確認する。</li> </ul> |